生れんとするもの

本多弘之

一

我等の問うべき問題は現在と言うことである。現在に生存しているということから様々な問題が起るのであって見れば、いかなる問題も現在というものを離れることはできない。亦現在を離れた問は真の問ではない。現に生きてある立場が問われる時、問は根本的な方向を持ち現在を包んで来るような地平が探究されるのではなかろうか。善導は『往生礼讃』において「彼の仏今現に在して成仏したまへり当に知るべし本誓重願虚しからず」といわれる。この場合でも「仏今現に在して成仏したまへり」という事実の発見があるからこそ「当に知るべし本誓重願虚しからず」ということができるのであろうと思う。現前せる事実こそ、深い問を呼び起す、『大無量寿経』の五徳現瑞においても「爾時、世尊、諸根悦予し姿色清浄にして光顔巍々とまします。尊者阿難、仏の聖旨を承け即ち座より起ち、偏に右の肩を袒ぎ長跪合掌して仏に白して言さく……今日、世尊、諸根悦予し……何が故ぞ威神の光々たる乃し爾るや」と、阿難の問が仏陀の今、現在の姿に値遇する所に起っていることが語られている。眼前に現在しまします仏陀清浄の姿に驚く所に問が出る故に、問われる内容は而して無限に深いと共に限りなく現在に用らく本願建立の世界なのである。如来の境界が現成しているが故に阿難が問を立てることが出来る。真に現在に生きる如来あればこそそれに感応する問が出る。問は阿難が出したものであるが、自ら慧見を以て問うたというように、現在において現在自身が問を起したとも言える所があって、その故に世尊はこの問を「善い哉、

阿難、問える所甚だ快し、深き智慧を発し、真妙の弁才をもって、衆生を愍念せんとして斯の慧義を問えり」と讃ぜられるのである。しかるにその現在の内容たるや、甚深広大、難知難見と言われる如く、過去、未来に対して現在と言われる場合の現在に止まるものではなく、過去も未来も現在の内容となり、過去の課題も未来の問題も、一切を包摂して余す所がないような絶対現在とも云えるものである。無限に広大であるが故に、過去の種々なる課題を引受け、甚深なるが故に深遠なる未来の問題を発すのである。そのような現在を明らかに表わすものが『大無量寿経』であろう。一切を余す所なく現在に包摂する如来の正覚を世尊は『大経』において本願の因果として語られたのであろうと思う。本願によって顕わされる現在は、法蔵菩薩の五劫の思惟によって摂取される仏土荘厳の清浄の行であり、衆生往生せずんば正覚を取らじという悲願によって起り、兆載永劫の修行そのものとなりまた即得往生住不退転の信心として成就するのである。して見れば本願の世界以外に如来の世界はない。「弥陀の本願まことにおわしまさば釈尊の説教虚言なるべからず」である。正覚の世尊が語られたが故に真実なのではあるが、語られて見ればそれは正覚の世界の原理であるが故に、又、正覚を開かしめた力が願力なるが故に、本願あるが故に開顕した真実なるが故に、本願海は正に現前の事実となる。正覚が本願を正当化するのでなく、正覚が本願の虚しからざるを証明しているのである。しかして「如来、世に興出したまう所以は唯弥陀の本願海を説かんとなり」（正信偈）と信知することが出来るのである。さてその不取正覚の本願が即得往生として成就するといえば、そこで願の成就は成り立つということが出来るが、しかしながら現在が過去、未来を包んだ大現在であるからには、我等がその現在に安心立命できるのでなければならない。願生彼国即得往生に不退転の安心立命ができるということでなければならない。願生即得生において現在が過去・未来の問題を一切包摂しているのであらねばならない。そこにおいて死して生きるという人生究極の態度が確立されるのであろうと思う。人生の問題を現在において荷負するということの表明が「即」の言である。即時入必定とも言われるが、この即を見失って、人生問題とか宗教問題の解決はない。しかし又、即という事にこだわる余り、複雑な問題、矛盾葛藤の事実を、科学的方法において取られる如く、単純化し系統づけて法則を見つけだすという方法を取って見たり、又、

「即」の事実を神秘的体験の如きものですり変えて、問題的に生きることを捨離したりすることは、仏教の伝統である如実修行相応に反することとなろうというものである。生きたまゝ死人となるとか、即身成仏という事において考えなければならないのは、この点なのではなかろうか。勿論「不断煩悩得涅槃」以外に生き得る立場はないであろう。さればこそ「消し失はず」して、しかも「得」と云えるような「不断」にして而も逃げるのではなく、断つ必要がなくなるような所が求められるべきであろう。「「即」はすなわちという、時を経ず日を隔てぬなり」（一念多念文意）今、この現前の事実において真の安心立命も成り立ち、この現前の境遇に落在する所に真の自己が成り立つのである。そして生きた事実より起す問こそが真実を求め真実を呼ぶ問となる。現在が起す問に現在が答え、問自身がまた問を深く問いつめることを要求する。しかれば因位の本願の起る所には十劫正覚の成就が用らき、成就ある所に法蔵菩薩の永劫の御修行がまします、本願とその成就が相互に応ずる所、願力成就の事実において広大なる仏法の世界が開かれるのであろう。

二

本願の大行が絶対満足、円融無碍でありつつ、同時に無限に本願を展開して衆生に用らきかけるということ、煩悩に眼障えられるものに、倦きることなく常に摂取の光明を照らすということは、本願が現在と未来を内に孕んで、衆生の側の有限なる眼の絶対否定と、如来の大悲より起る大現在の絶対肯定を同時同処に成り立たしているということなのである。そもそも願は、我等が現在の有限の条件下に、有限を突破して起ってくるものであり願そのものは現在に起りつつ未来を内容とするものである。「未来悪世の無智の我等が為」（安心決定鈔）にといわれる所以であろう。有限なる我等凡愚の様々なる境遇状況を超えて衆生一切の志願を満たさんとするのである『大経』の法蔵菩薩の四十八願とても「設我得仏」といって常に未来的に願を設立される。願の相から云っても往生成仏を究竟することが主眼であるから常に当来の形で述べられるのである。しかしながら願の興起は、現在の罪濁の群生、有限の矛盾に苦しむ凡夫において大悲が顕現するのであるから、たゞ徒らに未来の希望に止まるものであってはならない。現実に苦しむものの一時的逃避や、現実を虚飾する偽善や、現世利益の名の下における迷信、奇跡、或は目的喪失の故にデカダンに陥るを恐

れて外から目的論的意義を植えつけるような、分別上の小細工であっては断じてならない。本願における未来は現実を踏まえ、現実に生気を齎らし、現実と無碍に融通して、しかも現実に妥協せず、現実の虚妄に堕落せず、真実と虚偽、現相と未来相、因位と果位の一線は確固として動ぜずして自在に行ずるものであらねばならない。しかればこの未来性は、時間における未来ではなく、むしろ絶対現在の存在構造を明確にせんが為の、時間をこえたものが時間的に自己を表現した所の、未来であると言って良いのではなかろうか。

三

如来こそが真実であるということは、如来の本願が大行として我等を真実に救済する所にある。従って「今日世尊住奇特法……今日天尊行如来徳」と阿難が歎ずる如き、絶対現実に光輝溢るゝ姿を現成せしめる力、本願が持つ不可思議なる力が現在の苦悩の衆生の上に用いて、罪濁を転じて功徳の潮とする時、大悲の本願が従如来生の用らきを持つものと言われうるのである。この本願力の用らく姿を信心という。本願の現在する相、本願の衆生に現じた相を衆生の側から信心というのである。金剛不壊の真心と云うが、如来が実現した姿、如来回向の信心であって見れば、大行において衆生は退転することなき大地に住する身を得ることができ、ここに住して未来には永遠の生命を感得することができるのでなければならない。未来への開けとしての永遠性は、現在の一念にのみ開けるものである。現在の一念を離れた未来は、観念の未来であって、人間救済の真実真理たることはできない。開かれたる永遠性は、教として伝えられて、現今に生きるものでなければならない。現在に用らくものが真の永遠である。しかして現在の一念に徹して見れば、全て無限の語りかけに非ざるはない。一色一香無非中道といい、一切衆生悉有仏性というも、対象的な分析、総合より云い出だされる言葉でなく、現在の一刹那に深く自分を徹して、仏陀正覚の名のりたる本願成就の名号、南無阿弥陀仏に照らされてこそ味われる言であろう。全存在を以て絶対無限の阿弥陀に帰命するその時、大悲無限の智慧光たる阿弥陀は、全存在を救済したもうのである。不退転に住することが即ち阿弥陀の不虚作なる用らきであり、絶対現在の大智慧海の作用である。しかし退転せぬということは、停止することではない。絶対現在は止まらぬのであるから、如来の本願は絶対現在に念々

に勅命を発して一時として止まることを知らない。如来は止まることがないが、凡愚の妄眼が光を見失って陥る先は疑である。この疑に対して強く呼ぶ声が未来の言語であると云えよう。真の現実を忘れ、自己の姿を忘れて無限を勝手に仮設したり、自己に近づけたりすることが即ち無限に対する疑である。それを破せんが為、そして絶対現在を輝き出さしめんが為に未来は現在を否定し現在に止まることの誤りを断つのである。未来の現在に対する絶対否定の故に、法蔵菩薩は兆載永劫の修行に励まれ、本願を成就されるのであろう。しかれば『大経』四十八願の内容は未来による徹底的現在否定であると云えよう。否定し尽して終るということなき絶対否定こそが本願成就の内面なのである。この否定は我等凡愚の分別判断の遠く及ばぬ所である。我等はたゞ絶対無限に否定肯定されて生きるのみである。無限阿弥陀の絶対否定が本願の未来相であり、その絶対肯定が本願成就の現在相であるとも云えよう。従って現在未来というも二者別々のものではなく、一体となって否定肯定し、絶対現在の真実信心となるものでなければならない。しかれば未来とは本願大悲の必須なる特性ではあろう。しかし本願成就の真実信心においては、未来ということが、信心に内在するものではあるまい。信心に未来を内在的に孕むというなら、本願成就が成就せる真実であることに、円満成就ということに矛盾して来るからである。さらば内在的表現のもつ意味は何処にあるのであろうか。

四

「それ衆生ありてかの国に生ずるものは、みなことごとく正定の聚に住す。所以はいかん、かの仏国中にはもろもろの邪聚および不定聚なければなり」「あらゆる衆生その名号をきゝて信心歓喜せんこと乃至一念せん、至心に廻向せしめたまえり、かのくにに生ぜんと願ずれば即ち往生をえ、不退転に住せん、ただし五逆と誹謗正法とをばのぞく」と本願成就の文に語られている。この雑染の世に散乱麤動する我等は、自己自身の存在を見失って、徒らに喜怒哀楽に身をやつしている。一時として自在に現前の自己を生きることができない。しかし無限大悲は常に照らして、遂に衆生の住する処を明かにし給うた。名号において真実清浄の本願が自己を成就し、無限の功徳を我等に与えたのである。汚濁の我等に一たび蓮華が開き不退転に住することができれば、それは自ずから定まった正定聚であり、知進守退の智を名号に聞き、現在の無限

の心光に感動する所である。生命の真実に安住して、不安動揺なき所こそ、我等の心底から求める所であるから如来大悲の本願も、現生に入正定聚の益を与えずんばやまない。『無量寿経』四十八願中第十一願に云う。

「設い我、仏を得んに国中の人天、定聚に住し必らず滅度に至らずば正覚を取らじ」

人間の立在すべき大地を与えんという大悲がここに自己を明示して「定聚に住し、必ず滅度に至ら」しめんと叫ぶのである。如来の本願が無限の願であるということの意味は、有限の人間が安心立命できる住所を必ず見出さしめんということであって、無限的に無限に願ずるという論理的無限ではない。有限の人間が真実の自己に住して「必ず滅度に至る」という誓願に乗托することができるということが、無限阿弥陀の無限的なる行らきなのである。不住定聚必至滅度者不取正覚という所に、本願が自己自身を無限の願であると自覚し、真実に有限無限の実在関係を成立させ、本願が誓願であることを自証することができたのである。親鸞は異訳『如来会』の第十一願文を「証巻」に併引されて真実証を明らかにされる。「若し我、成仏せんに、国中の有情、若し決定して等正覚を成り大涅槃者を証せずば、菩提を取らじ」

「決定して等正覚を成り大涅槃を証」することにおいて我等の真の救済が成就し、同時に誓願が成就する。我等の救済の成就とは、即ち究極的真理の顕現であり、真実信心の発起であり、それがつまり正定聚に住するということである。この信心は「金剛不壊の真心」であり、絶対的なる真理の発現である。実相が実相自身の本来性を回復したのであり、我等にとっては如来の廻向として信楽を獲得することなのである。獲得された信心は、絶対無限の自己実現であるから、それ自らにおいて一点の欠ける所もない「極速円融の白道」である。真理は絶対満足であって、これに何ものをも付加することはできないし、又付加する必要もないものでなければならない。絶対無限の自己表現たる南無阿弥陀仏が信心として我等の上に具現するのであって、信心自体が永遠であり、超時間的、超空間的、超個人的である。「凡そ大信海を按ずれば、貴賤緇素を簡ばず男女老少を謂はず造罪の多少を問はず……尋常にあらず臨終にあらず、多念にあらず一念にあらず、唯是れ不可思議不可称不可説の信楽なり」（信巻）と云われるし、又「親鸞は弟子一人ももたず」といわれると同時に「善信が信心も聖人の御信心もひとつなり」と言い切ることができたのは、如来回向の信に

対する絶対の確信があったからである。「金剛堅固の信心のさだまるときをまちえてぞ、弥陀の心光摂護してながく生死をへだてける」というも、信心の決定が絶対無限の行らきに摂せられて、有限なる我等が生死得脱の信心を獲得することこそ救済の全体であることを表わしている。『浄土文類聚鈔』には「常没の凡夫人、願力の廻向に縁りて真実の功徳を聞き、無上の信心を獲れば則ち大慶喜を得、不退転を獲、煩悩を断ぜ令めずして速やかに大涅槃を証す」と述べられているし、「和讃」にも「煩悩具足と信知して本願力に乗ずればすなはち穢身すてはてて法性常楽証せしむ」といわれて、絶対不二の信心を歎ぜられている。しかるに、正依『無量寿経』第十一願には、住正定聚必至滅度といい、「信巻」には信心を「証大涅槃の真因」と云われている。信心が絶対円満の真理であり、正定に住することが、絶対の救済であるならば、その上に「必ず至る」べき滅度など不要ではなかろうか。また信心そのものが全体であって、殊更に涅槃の因という必要はないではないか。無上涅槃の極果が、信心の因によって達成されるべき目標であるとするなら、涅槃は無限で信は有限になる。住正定聚が滅度に至るを目的とする単なる因であるなら、それは絶対ではなく手段としての方便になってしまい、信心を真理とする訳にはいかなくなるではないか。

『論註』下巻に曇鸞は「仏願力に縁るが故に正定聚に住す、正定聚に住するが故に必ず滅度に至りて諸の廻伏の難なし」と言われる。この文を一見すれば、仏願力によって正定聚に住し、その正定聚は必ず滅度に至るということが正しく定まった所であって、必至ということが正定聚の実質的内容であるということもいえる。つまり滅度という未来の絶対無限の満足が現在に決定しているから現在も絶対満足であるという訳である。しかし「必至」という限り、時間的未来が現在の内容となり、現在自身に絶対満足することではなくなる。未来をも包んだ絶対満足といっても、説明的弁解であって、念仏の絶対永遠性を表わしているとは思われないところがある。未来という要素が入る限り、現在の身には不確かさが付き纏うものであり、正定の意義がぼかされることになりはしないか。また「必」が絶対必然性を表わすものであるというなら、その必然性たる根拠はどこにあるのであろうか。絶対無限の真心なるが故に絶対無上の証果を必然性として有するというなら、その言の中に矛盾を包含しているのである。つまり絶対であるなら、目的も

手段も一体であって、真心そのものが満足成就しているべきであり、何らかの意味で外に円満を見るならば、それは内に欠除を認めるのであるから絶対無限とは云えないのである。時間的にもせよ、空間的にもせよ、必然的結果を証果として現在に有しないならば、それは絶対円満の真理ではないと云わざるを得ない。しかるに親鸞が信心を「選択廻向の真心、金剛不壊の真心」といいながら「斯の信行に由って必ず大涅槃を超証す」と云って、「かならず」といわれる真意は、どこにあるのであろうか。「信巻」に云う、「遇(たまたま)浄信を獲ば是心顛倒せず是心虚偽ならず、是を以て極悪深重の衆生、大慶喜心を得諸の聖尊の重愛を獲るなり」と。信心そのものは明かに真実心である。亦「若は行、若は信、一事として阿弥陀如来の清浄願心の回向成就したまふ所に非ざること有ることなし、因無くして他の因の有るには非ざるなり」(信巻)と、その他、他力回向の信心の絶対性を表明する言を枚挙するに暇はない。然れば、念仏において開ける絶対真実は即時に開華して「信心清浄なるものは華開いて則ち仏を見たてまつる」とある如く「此身において」(易行品)絶対の真理に会って「不退の風航」に乗ずるものでなければならない。真実信心そのものには念仏の功徳が摂まっていて、時間空間を超越してそれを内在せしめ、一点も欠けるものはないのである。信においては、願生即得生、住不退転であって、そこに時間的未来、空間的欠除があろう筈がない。信心自体には「かならず」と言わしめるべき要素は何も必要としないではないか。「清浄光明ならびなし遇斯光のゆへなれば一切の業繫ものぞこりぬ畢竟依を帰命せよ」「道光明朗超絶せり清浄光仏とまふすなり、ひとたび光照かふるもの業垢をのぞき解脱をう」といわれるではないか。それでは「かならず」という言葉は何の為のものであろうか。

五

先ず「かならず」とあるのを「真の仏弟子釈」と数首の「和讃」に聞いてみよう。「信巻」に云う「真の仏弟子と言は真の言は偽に対し仮に対するなり、弟子とは釈迦諸仏の弟子なり、金剛心の行人なり、斯の信行に由って必ず大涅槃を超証すべきが故に真の仏弟子という。」

偽に対し仮に対して、真を立てるのは、人間存在の構造によっている。「真なるものは甚だ以て難く実なるものは甚だ以て希なり、偽なるものは甚だ以て多く虚なるものは甚だ以て滋し」といわれるように、虚偽迷妄に陥

っている人間存在において、真なるものとは、釈迦諸仏の弟子たる金剛心の行人であると云われる。この「行人」について「必ず」大涅槃を「超証」すべきが故に真の仏弟子であるとされる。ここにおいても、金剛心そのものに「必」は含まれない。ここでいう「必ず」はその行人の上にあることである。そして金剛心の行人を仏弟子として仏とはしない。「和讃」には「信心よろこぶそのひとを如来とひとしとときたまふ、大信心は仏性なり仏性すなわち如来なり」といわれる。大信心は如来である。絶対無限それ自体であって自体満足の永遠である。しかるにその信心が発起したる場として、その信心を喜ぶ人間はそれそのまま無限ではあり得ない。我々は有限の時間的、空間的存在を離脱することによっては、相対的有限に対立するような相対的無限を得ることはできない。有限を捨てて無限はない。しかし「浄土の真実信心の人はこの身こそ浅ましき不浄造悪の身なれども心はすでに如来と等しければ「如来とひとし」……」(末灯鈔)といわれるのである。人間のままで絶対清浄そのものになることはできない。しかし逆に有限なるが故に信において無限を知って無限を尊ぶことができる。有限存在のままに無限の信心を慶ぶ人なるが故に「如来とひとし」といわれて尊ばれるのである。また云う「若不生者のちかひゆへ信楽まことにときいたり一念慶喜するひとは、往生かならずさだまりぬ」「尽十方の無碍光は無明のやみをてらしつつ一念歓喜するひとをかならず滅度にいたらしむ」

誓願が成就するのは、我等凡夫の上においてである。我等が凡夫であるが故に立てられた誓願であるから、我等の上に成就しなければならない。しかるに絶対無限が我等の上に、真実信心として成就するならば、もうその上に付加すべきものはない筈である。しかし人間の存在構造はそのように単純ではない。仏教伝承の歴史が、小乗より大乗へ、そして八万四千の法門が転々相承され人間性の真実を明かさんとして来たのも、人間存在が如何に難題であるかを示すものである。浄土教が生れ、法然・親鸞に伝承され身証された真実も、本当に会い難く、解き難い教えであったのであり「弘誓の強縁多生にも値い難く真実の浄信億劫にも獲難し」と嘆ぜられるのも、この人間存在が如何に難題であるかを、実感されているからであろう。「ひと」という限り清浄そのものであることはできない。絶対的無限であることは勿論できない。人身を持つ限り有限を離脱することはできない。し

かしこの有限こそがまた絶対無限に摂取され智慧光に照見される所であらねばならない。一如より起る阿弥陀の願は、正しく「悲」として我等にかけられる他ないのである。「弥陀の本願信ずべし、本願信ずる人はみな摂取不捨の利益にて、無上覚をばさとるなり。」誠に摂取不捨は「ひと」の上にかけられなければならないのである。そしてこの人間は絶対の真理を獲得することにおいて、時間的、空間的存在を超えた永遠無限の法性に呼びかけられ、万物一如の真実に開眼しつつ、その絶対真実の用いた人間存在に落在するのであり、本願の「かならず」と呼ぶ声に絶対信順するのである。大涅槃は超越的に証せられるのである。「かならず」は真理の上に付加さるべきものでなく、我等の上にあることである。必然性を表わす言葉を使わざるを得ないのは、真実そのものの不充分に由るのでなく、虚仮を離れることができない人間構造に因るのであろう。信心を涅槃の因というのも、信心が単なる因果の始めだというのでなく、信心は信心自体に絶対満足している故に、それは、外に涅槃の果を待つ必要はない。信心の所に大涅槃は超越的に成就しているのであって、時間的未来に信心相続を以て果を成就するのでは断じてない。ただその真実が人間の上にある限りは、成就のままに因であって、果ではないというのである。真実一如が衆生の上に南無阿弥陀仏なる本願成就の名号として自己を表現し、顕わし出している以上、その名号を具した真実信心である以上、それは生命ある仏果である。方便がそのまま法性となり、方便のままに絶対である。方便においてのみ、我等が絶対に値遇するなら方便即絶対でなければならない。絶対からの方便への自己実現でなければならない。絶対の仏果が与えられながらそれを仏果として受取ることが出来ないのは、人間の愚痴妄昧性に由るのである。『一念多念文意』に『法事讃』の文を釈して曰く「致使凡夫念即生といふは「致」はむねとすといふ…いたるといふは実報土にいたるとなり、使はせしむといふ、「凡夫」はすなわちわれらなり本願力を信楽するをむねとすべしとなり……「即」はすなわちといふ、ときをへず、日をへだてず、正定聚のくらゐにさだまるを即生といふなり、「生」はむまるといふこれを念即生とまふすなり、また「即」はつくといふつくといふはくらゐにかならずのぼるべきみといふなり…信心のひとは正定聚にいたりて、かならず滅度にいたるとちかひたまへるなり、これを致すといふ……「凡夫」といふは、無明煩悩われらがみにみちみちて、欲もおほ

く、いかりはらだち、そねみねたむこころおほくひまなくして、臨終の一念にいたるまで、とどまらず、きえずたえずと、水火二河のたとえにあらわれたり。かかるあさましきわれら、願力の白道を一分二分やうやうづつあゆみゆけば、無碍光仏のひかりの御こころにおさめとりたまふがゆへに、かならず安楽浄土へいたれば弥陀如来とおなじく、かの正覚のはなに化生して大般涅槃のさとりをひらかしむるをむねとせしむべしとなり」。真実心が本当に自己を満足せんとする時には、不実を完全に払拭せんとするであろう。真理が全貌を顕現せんとするならば、一微塵の曇りをも除こうとするであろう。しかし人間構造においてそのような真実真理を実現せしめることは、真正面から自己を見つめるものには出来ることではない。惜しみなく遍ねく照らす光に値遇しつつ、自己は真理そのものには成り得ない。晩年の親鸞が「愚禿悲嘆述懐和讃」を作製されて「浄土真宗に帰すれども真実の心はありがたし、虚仮不実のわが身にて清浄の心もさらになし」と懺悔されるのも、この人間構造を表明されているのである。またこの人間構造なるが故に、本願は無間恒常に我を照らすのである。真実の解決は解決そのものが動的である。真実の静は動を失わない。動のままに静でなければならない。人間構造を破壊して立てたものは偏狭なる静的真理ではありえても真の人間構造を解明した静動一如の真理たることはできない。散乱麤動、虚仮不実の人間を離れてもし清浄真実の花が咲いたとしても、如何に美しかろうとそれは徒花である。有限なる存在はあくまで有限なる構造を離れずして無限の真実を獲得できるものでなければ真の人間の問題の解明ではないというのが、釈尊に始まる仏教の真実求道の歴史である。信心正因とは、現に此の現実は、信心のみが絶対真実であって、そこに静動一如の真理が開顕し、人為的回向をその上に付加する必要が毫もないことを現わすものであろう。「証大涅槃の真因」と「因」の上に「真」の一字を加えられるのも絶対真実の如来たる信心に涅槃つまり実相、真如は、具されているものであって「無上涅槃の極果」はその外にあるのではないことを表わさんとするのであろう。如来が如来となるだけのことであって、真実の上では因果一如である。それを因とし果とするのは、我等煩悩成就の凡夫の側に立って、言うのであって人身を有する所に、はっきりと分限を定めるだけのことである。しかれば「かならず」とは真実が虚仮に語る智慧の言葉であるとも云えよう。「必はかならずといふ、

かならずといふはさだまりぬといふこころ也、また自然といふこころなり」（尊号真像銘文）とも言われる。つまり「かならず」とは、現在の不足が時を俟って満足せられることの確約でもないし、未来に新たなる真理が起るべき予言でもない。「さだまりぬ」ということ、現生正定聚の信心確立の内部構造を明らかにする言葉であろう。自然法爾の現前の事実が、その内部構造に「必」を有して成立しているのである。勿論、有しているといっても、単に内在的に有するのではなく、云わば超越的に「必」を有しているのである。如来の深広無涯底なる智慧海は、我等凡愚を浮べているのであるが、一文不知の我等はそれを知らずに無明の闇に沈むのである。しかし「無始流転の苦をすてて無上涅槃を期すること如来二種の廻向の恩徳まことに謝しがたし」であって、「一切の有碍にさわりなき」信心海に生かされることができるのも事実なのである。

六

ここで気付かねばならぬことは「必至滅度」は本願文の内容であるということである。「かならず」ということは誓願の上にあることであって、成就文の上にはないのである。如来の本願から言えば本願の成就すること、真理が人間の上に確立さるべきことは、必要にして必然のことなのである。その故に曇鸞は、仏願力によって正定聚に住すと言われるのである。「必至滅度不取正覚」の誓願あればこそ正定に住する信心が決定し、即時に慶喜して無疑なることができるのである。そして「証巻」では「正定聚に住するが故に必ず滅度に至る。必ず滅度に至れば即ち是れ常楽なり、常楽は即ち是れ畢竟寂滅なり、寂滅は即ち無上涅槃なり」と云われる。単なる滅度が常楽であると言わず「必至滅度即是常楽」といわれる。これが亦無上涅槃である。つまり本願の文を成就に照らし成就文として読まれるのであって、必至滅度不取正覚の願文が成就したる正定聚の人の上において、その信の内景を述する文として引用されるのである。必至滅度即ち無上涅槃とは、そこで始めて云えることであって、願文としての必至滅度をそのまま証果の内容として引用されることを気付かず、ここでも未だ願文のままの意であると読んでは、全く御引用の意趣を誤まるものと云わざるを得ない。曇鸞が「住正定聚」と「必至滅度」の間に「故」の一字を加えられたのは、阿弥陀如来の本願力の徒然ならざるを、三願によって的証されんとする

箇所であることを考えれば「故」の字を加えるのも、願力成就を明かにしようとされる意図であることが了然として来る。「正定聚に住するが故に必ず滅度に到って諸の廻伏の難なし。」「必ず滅度に至る」べしという悲願は、仏力によって正定聚に住することで、超越的に絶対円満しているのである。正定聚に住するという真理の実現であるからこそ、逆に「必ず滅度に至」らしめんという悲願が徒設でないことが証明されているとも云えるのである。真実信心の獲得という絶対目的が成立ってこそ必至滅度不取正覚という誓が真実たりうるのである。この事を「正信偈」においては「等覚を成り大涅槃を証することは必至滅度の願に成就したまへり」と明かにされてある。願の内容としての必こそが正覚を開くのであり、開かれた証というのは、願の成就によって成り立っているのである。成就が因に帰り因願が成就を求める。「必」が「成」を基礎づけ「成」が「必」を確証する。我等が即得往生住不退転に立ち得た時、誓願は更に深く「必至滅度」の呼びかけを起し、退転せぬままに、信心は因の位を自覚するのである。「必」が成就することにおいて涅槃を証するのであるから「必」は証大涅槃の基盤である。「必至滅度」の誓願が、我等の住所を与えるのであらねばならない。しかれば「必」の字は「不断煩悩得涅槃」の内部構造を表明しているものであったのである。真の涅槃は世間に著せず涅槃に住せぬ無住所涅槃でなければならないということを「必」がより明瞭に表わしているのであろう。「必」を「自然というこころ」であるということは、本願の内面に自己を投入することができた時に始めていいうる言葉である。その即時に本願は自ら「かならず」と発起して、その発願の所に願が願自身の無限の深みを見ると共に、超越的に絶対無限の願成就を発見するのである。絶対無限の大慈悲の用きの相から言えば、真実真理の開顕は必然性であり、絶対無限の用きそのものは自然法爾であるとも言えよう。自然が必然として現われるのを「一如法界よりかたちをあらわ」すというのであろう。善導の『観経疏』の深信釈もこの内面的な超越内在的構造を叙して余す所がない。「自身は現に是れ罪悪生死の凡夫恒劫よりこのかた常に没し常に流転して出離の縁なし」と深信するのと表裏して「彼の阿弥陀仏の四十八願は衆生を摂受して疑なく慮なく彼の願力に乗じて定んで往生を得」と深信すとある。罪悪生死の凡夫が摂取され、無有出離之縁の絶対否定が定得往生の絶対肯定に転ずる。この定得往生は先引

の『尊号真像銘文』によっても「「必」はさだまりぬ」というところであるから、ここは必得往生と言っても良かろう。いうなら、必は定の内的動因というか、原動力とでもいうか、定をして定たらしめる原理とでもいうか。この「必」が絶対現在の究竟的救済の根拠であり、仏願の虚しからざることの証拠である。絶対無限の救済は仏願よりいえば必然であり、成就の如来よりいえば自然である。無縁の慈悲より起る本願の現実的救済を如実に示すものが正定として成立する信心の絶対必然性である。摂取不捨の力動的内因は、絶対否定と絶対肯定の矛盾的統一であり、その統一を自然に可能ならしめるものが願力の必然性である。而してこの「かならず」は因果的必然を表わすのではない。因果一如の必然性である。果において観ぜられる因の任運なる成就であり、凡夫に発起する真理の絶対性なのである。その絶対性は、現生正定聚として、我等が住するこの世界の中で、しかも世界を超えて成立するものでなければならない。現実の我等の生活目的を未来に置いて、現実の生命を手段にするならば、必然の因果を時間の中にのみ見ることになり、絶対の真理は、単なる理想となり、我等の生命の真実義を忘失しなければならない。現在に円満がなくして未来に走ることは、いわば砂上の楼閣であって、そのような所に安住することはできない。現在において、現在の真の意味を見出す所に、真の永遠の未来が現れるのでなければならない。現在に不満あるは、如来に対する不信なのである。

七

本願成就の文の「其有衆生、生彼国者皆悉住於正定之聚所以者何彼仏国中無諸邪聚及不定聚」は、因願が成就したのであるから「彼の国に生ずれば皆悉く正定の聚に住す」と普通には読まれるのであり、物語りとしてはそれでも良かろう。しかし現実の摂取不捨の教としてはそう読んだのでは解りにくい。成就文が本当の成就を表明する文である為には浄土に生れたならば助かるぞというようなことを言うのみであってはならない。それでは現実の苦悩の我等は助からない。親鸞はこの願成就の本当の意味を『一念多念文意』に次の如く読まれている。「釈迦如来五濁のわれらがためにときたまへる文のこゝろは、それ衆生あって、かのくににむまれんとするものはみなことごとく正定の聚に住す、ゆへはいかんとなれば かの仏国のうちには、もろもろの邪聚および不定聚はな

ければなりとのたまへり。この二尊の御のりをみたてまつるに、すなわち往生すとのたまへるは、正定聚のくらゐにさだまるを不退転に住すとはのたまへるなり、このくらゐにさだまりぬればかならず無上大涅槃にいたるべき身となるがゆへに等正覚をなるともとき、阿毗跋致にいたるとも、阿惟越致にいたるともときたまふ、即時入必定ともまふすなり。この真実信楽は他力横超の金剛心なり」。「彼の国に生ずれば」という文のこころは「むまれんとするものは」でなければならない。これを親鸞は「証巻」において、『如来会』の成就文に「彼国の衆生、若し当に生れん者皆無上菩提を究竟し涅槃の処に到らしめむ、何を以ての故に、若し邪定聚及び不定聚は彼の因を建立せることを了知すること能はざるが故なり」とあるのを引用され、また『浄土論註』の「若し人但だ彼の国土の清浄安楽なるを聞きて尅念して生れんと願ぜんものと亦往生を得るものとは即ち正定聚に入る」とあるのを引用されて、正依『無量寿経』の教意を明かされている。真実金剛の真理は、真実信楽としてのみ獲得されうる。真実に生きようとするならば真実信心を獲る以外に道はない。邪定や不定は真実の実相を見ることができないものである。ありのままの真理にめざめるなら、仏願力の必定に安住することができ、仏意に随順することができるのであろう。信心があるから必定なのではなく、必定の故に信心が成立するとも云えよう。そこにおいて成立した信心は「必定」の証明である。本願の不虚作なることの証明である。仏の本願力が住持すること虚しからざる証しである。第十一願は住正定聚の願とも云われて来たのを「証巻」において「必至滅度の願」「証大涅槃の願」と名けられるのは、この本願の意義を「必」と「証」とに見られるのであって、住正定聚は、願の相ではあっても願としての本質は「必」あるいは「証」にあると取られたのであろう。「必」こそ信心の真実を内から証明する言葉なのである。必定という絶対安住を金剛の信心というのである。「必」を時間的未来への必然性と見るものは、時間という要素を加えることによって「必」そのものに不確定な意味を加えていることを知らねばならない。純粋なる絶対的「必」は現前の事実でなければならない。しかしその事実は我等が作為するものでもなくまた作為さるべきものでもない。おのずからしからしめらるる自然の事実である。この自然を他力と云って、この真理の絶対性を現わすのである。「わがはからはざるを自然とまふすなり、これすなわち他力にてまします」

（歎異抄）のである。「行巻」には、六字名号を字訓を以て釈した後「是を以て帰命は本願招喚の勅命なり、発願廻向というは如来已に発願して衆生の行を廻施したまふの心なり。即是其行といふは即ち選択本願是也。必得往生というは不退の位に至ることを獲ることを彰はすなり。経に即得といへり、釈には必定といへり、即の言は願力を聞くに由て報土の真因決定する時剋の極促を光闡するなり、必の言は審也、然也、分極也、金剛心成就の貌なり」と云われる。「かならず」と強く誓い、それを恰かも未来の如く表現するのも、この凡夫が難信なる真理を獲得しえた事実から、発現せしめた源泉の新鮮不断、湧溢無尽なるを表明せんが為である。不退の位に至ることを得て始めて、必得往生の願力を内感するのである。名号釈において善導が必得往生と言い得たのも、本願成就の名号において已に成就されてある願行円満の仏の正覚に与ったからである。現在に生きるものに真実が顕われてのみ本願の「必至」が、用らく悲願となり、我等に対して証の用らきを成ぜしめる誓願の生きた意義を表わし来るのである。「必」とは煩悩具足の我等が虚仮の中において、内在的に真実を得ることの必然性ではない。「必」といわねばならぬのは、我等に超越的に真実が発起するが故に、そして内在的にしかものを見ようとせぬ我等有限の眼を開かしめんが為である。しかして真実の清浄、絶対なる無限の、自ずから然らしむる自己実現を「かならず」というのである。絶対無限の阿弥陀が誓う「必」であるから、表現は未来となるが、それは相対有限が有限的に表象する時間的未来への確率的大きさをいうものではありえない。「必」は有限を場として成立する絶対無限の真理の事実を云い表わしているのである。親鸞はこれを「必の言は金剛心成就の貌なり」と云われるのであろう。金剛心の成就は絶対他力の自己表現であり、人間が人間であるままに、真理に生きることができる立場の開闡である。かくして一如法界より云えば滅度は永劫の昔から成就されてあるものであろう。その故に「仏は衆生にかわりて願と行とを円満して、われらが往生をすでにしたためたまふなり、十方衆生の願行円満して、往生成就せしとき機法一体の南無阿弥陀仏の正覚を成じたまひしなり」（安心決定鈔）といわれるのである。しかるに生死に迷う我等凡愚にとりては、往生、成仏は常に「永遠の未来」の形で言い表わす外ない。即身成仏は我等有限の分限を忘れた独断でしかないからである。しかして「必」の言はこの我等の現在における「永遠の未来」

と如来正覚の絶対現在の円満成就との交差点に立つ言葉であるとも云えよう。つまり「衆生往生せずば、われ正覚をとらじ……仏の正覚は、われらが往生するとせざるとによるべきなり」（安心決定鈔）といわれるように、清浄仏国は我等の上に成就しなければならない。成就せしめんという悲願が「かならず」と我等の上に誓われるのであるから。死を以て生の汚濁を浄化するというなら何も仏教は必要ではない。従って、生命の臨終に涅槃を証すというは生死の一大事である死において、真実と虚偽の分判を明らかにする為の比喩でなければならない。生を死に置きかえることで、有限を無限に出来るというなら自殺の推奨にしかならないではないか。生の濁水をそそぐものは生を断つことではなく「死して生きる」というような生の立場の転換たる生即無生といえるような願生において、転成的に功徳のうしおに一味となるものでなければならない。「死して後を仏と人やおもふらんいきながらなき身をしらずして」とは至道無難の語であるが生死輪廻の死であれば死において真実が現われよう筈がなく、立場の転換を教えて真実に生きる事を示しているのであろう。有限の側でいう生も死も、無限に振り替える訳には行かないのである。

八

而して「それ衆生あってかのくにゝむまれんとするものは、みなことごとく正定の聚に住す」とは、衆生に発起する真理は、その真理自体の源泉から起って「みなことごとく」摂受して発起の即時に「必」の誓願を正定の事実において完全成就せしめんとすることを表わすものなのである。つまり「かのくにゝむまれんとする」ことそのことが、真理の根元の発動であり、真理が湧起するのであって見れば、そこに真理は円満に実現されんとするのである。ここに「むまれんとする」という動的状態をそのまま「正定聚に住す」というのは、現実の人間存在の動的構造による。この動における静こそ真の静動一如の真理である。その為に第十一願はどうしても「必至滅度」と云わざるを得なかったのである。これが動と静を一如ならしめんとする仏の大悲心なのである。その故に、この第十一願を親鸞が必至滅度の願と名づけられるのである。『歎異抄』の「弥陀の誓願不思議にたすけられまゐらせて往生をばとぐるなりと信じて念仏まふさんとおもひたつこころのおこるとき、すなはち摂取不捨の利益にあづけしめたまふなり」というも、蓮如の「お文」

に「たすけたまへとおもふ帰命の一念をこるとき、かたじけなくも遍照の光明をはなちて行者を摂取したまふなり」というも、南無と帰命すること、そのことが本願招喚の勅命であり、真実心の発起が絶対無限の自己成就の用らきであるということである。「むまれんとする」のは、単なる衆生の意欲ではない。衆生貪瞋煩悩中能生清浄願往生心と善導が云われるように衆生の貪瞋の心を突破して起る如来の真実心の呼びかけである。従って真に生まれようということは、天親の世尊我一心帰命におけるる如く、たゞ無量寿如来に帰命する時、即ち念仏申さんとおもい立つ心のおこる時にのみ成立するのである。念仏申さんと思い立つ心そのものが大なる仏願の中に包摂せられているのであり、仏心の中に摂取せられたる衆生の心であるが故に、衆生に起った心でありつつ、同時に摂取不捨の誓願が成就した所の真実信心であるのであり而してそのままに真実の利益となるのである。有限が、かえつて無限を証明する場となってくる。有限のままに広大なる仏法の大海の一滴を汲んで、無限の法味に与ることが即ち、無限阿弥陀仏の悲願成就なのである。これを願成就の文には「彼の国に生れんと願ぜば即ち往生を得、不退転に住せん」という。願生即ち得生であり、願生と得生の間には、空間も時間もない。念仏申さんとおもいたつ心の起る時、即ち摂取不捨に与るので、思い立った後に続いて助かるのではない。「即得往生といふは即はすなわちといふ、ときをへず、日をもへだてぬなりまた即はつくといふ、そのくらゐにさだまりつくといふことばなり、得はうべきことをえたりといふ、真実信心をうれば、すなわち無碍光仏の御こゝろのうちに摂取して、すてたまわざるなり、摂はおさめたまふ、取はむかへとるとまふすなり、おさめとりたまふとき、すなわちとき日をもへだてず正定聚の位につきさだまるを往生を得とはのたまへるなり」（一念多念文意）真の静は動を止めてあるのではない。動が真の動となったその時がまた真の静なのでなければならない。思い立つ心そのまゝに摂取不捨でなければならない。しかしこの心は、有限なる不実の我等が作心に、内在的なるものではない、もし思い立つ心を我が心と執するなら、我が有限の心を無限に振り向けて無限の果を得ようという有限無限の矛盾を解決することは出来ない。有限的に起す心は如何に清浄の相を持っていても、内に深く不実を秘めている。絶対無限そのものと、相対有限との分限を混同する誤まりを犯し、絶対というものを見誤っているのである。そこに

もし真実を見たと思うなら、それは有限なる煩悩具足の存在を、そのまま清浄な存在と見ようとするか、あるいは、前者に対立した後者を、前者の外に立てて、その他者に対して自己を憑依するような誤魔化しによって真実に対する眼かくしをしようとするのである。自己を絶対無限に見たてることも、自己の外に真理を立てることも単に人為的作為であり、似而非真理であって、真の人間の存在構造を解明し、人間救済を全うすることはできない。真の解決は絶対満足の行として名のり出たる南無阿弥陀仏に成就する。南無と帰命する心そのものが、無限の悲心の勅命であるからである。「おほよす仏のかたよりなにのわづらひもなく成就したまへる往生を、われら煩悩にくるはされて、ひさしく流転して不思議の仏智を信受せず、かるがゆへに、三世の衆生の帰命の念も正覚の一念にかへり、十方の有情の称念の心も正覚の一念にかへる」。（安心決定鈔）しかしてこの名のりを信ずる信心は、如来如実の信心であり、これを喜ぶ人は如来と等しと云われる。しかし真実を語る言葉は、常に不実の側から曲解され誤解される。真実そのものは誠に生きがたい。「信心のひとは如来とひとし」（末灯鈔）と言われるが「自力のこゝろにて、わがみは如来とひとしと候らんはまことにあしく候べし」（同上）と云わねばならぬのである。而して信心は絶対無限の自己表現たる名号を体として成立する。如来廻向の信心であるから、この信をよろこぶ人が諸仏の位におかれるのである。

「必」は如来の本願の言葉であるから必定とは本願力成就が必然的に定まったということであり、正定とは、仏の方より正しく定められたということである。その定まるのは「彼の国に生れんと願ずる」時であり「必」の字が生きた用らきをもつのは、永遠の現在に常に生れんとする心が思い立っているからである。その心は無限なる大悲の願心より起るが故に、その心の発った人を如来とひとしといわれるのである。真実信心は如来廻向であるから、その信心発起の人は如来の側より定められたる正定聚に住することによって、如来の如実なる本願実現の場となることが、即ち如来とひとしとも云えるのであろう。あくまでも有限は有限、無限は無限、しかも即として不一不二である。有限と無限の超越的にして内在的なる関係において我等は如来の教法を聞くことができる。仏が衆生に誓った「必」によって帰命即摂取の大現在に落在するを如来とひとしというのならば、生れんとするものこそ如来とひとしいのである。